

パフォーマンス評価、習得・活用（探究）型授業開発

—水産業のさかんな地域（小5 を例に）—

教職実践基礎領域
坂本 篤彦

I. はじめに

本稿は、パフォーマンス課題と習得・活用型授業モデルを主な手立てとし、小学校5年生・社会科授業における必要な資質・能力育成を目指した実践研究の報告である。

本稿は以下、四つの構成で論述する。第一に、「Ⅱ主題設定の理由」では国の施策や社会科学研究の視点からどのような教育が求められているのか、そこから本研究実践の主題を設定した理由について報告する。第二に、「Ⅲ研究の構想」では理論的な側面から実践の概要について報告する。第三に、「Ⅳ実践」では教師力向上実習Ⅱで実際に行った実践の内容について報告する。第四に、「Ⅴ結果、分析、考察」では児童の変容について報告する。

最後に、本実践研究における成果と課題を明かし、今後の展望について示す。

Ⅱ. 主題設定の理由

1. 今、求められている資質・能力

第四次産業革命。これは、近年の情報技術、例えば人工知能などの飛躍的な進化を表す言葉である。これによって、私たちの社会や生活が大きく変わる可能性が示唆されている。それはより良い生活にも繋がるであろうが、一方で人工知能が人間の仕事のほとんどを担い、奪うという危機的な未来予測もされている。「教育課程部会、教育課程企画特別部会（第20回）配付資料、次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（平成28年8月19日）によれば、このような時代においても、たくましく自らの人生を切り拓いていくために平成20年から「生きる力」の育成ということが言われてきた。この理念を次期学習指導要領ではさらに具体化するために①生きて働く「知識・技能」の習得②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性の涵養」の三本柱の資質・能力を求めていくと言われている（注1）。

2. 次期学習指導要領、教育課程改善の視点から見る、これからの教員に必要な資質・能力

また、上記の三本柱を軸に、次の六つの視点で教育課程の改善が必要であると述べている。①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）③「どのよう

に学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）⑤「何が身に付いたか」（学習評価の充実）⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）（注2）。ここからこれからの教員には主に二つの資質・能力が必要であることが分かる。一つ目は、単元、一授業を見通した学習過程編成の力（カリキュラム・マネジメント）である。二つ目は、児童の変容、成長を正しく見取り、評価する力である。

3. 社会科における資質・能力の育成

平成28年8月26日教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」によれば、先ほどの三本柱、六つの視点を成立させるためには「主体的・対話的で深い学び」が必要であると述べている。そして社会科において本質的な学びを実現させるための思考力や判断力、生きて働く知識・技能の習得には、以下の見方・考え方が必要であると整理している。

【資料1】社会科の特質に応じた見方・考え方のイメージ（教育課程部会資料より抜粋）

社会的事象の 地理的な見 方・考え方	社会的事象を、位置や空間的な広がりに着目して捉え、地域の環境条件や地域間の結び付きなどの地域という枠組みの中で、人間の営みと関連付けること。
現代社会の見 方・考え方	社会的事象を、政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論など）に着目して捉え、より良い社会の構築に向けて、課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付けること。

また、米田（2011）によれば社会科における授業構成理論として探究Ⅰ（分かる過程）と探究Ⅱ（考える過程）とに分けて理論を展開している。本稿では特に探究Ⅰに着目する。彼によれば、「分かるとは、社会のしくみが分かる（社会認識）ことである」（注3）と説明している。また、その過程を「なぜ疑問の発見・把握→予想・仮説の設定→仮説の検証のための資料の収集と選択、決定→選択した資料をも

【資料2】米田氏の社会科・学習過程



とにした検証→説明的知識の習得」(注3)と説明している。説明的な知識を習得したうえで、探究Ⅱにおいて新たな事象へ応用したり、新たな問いを解決したり、未来予測・価値判断したりする流れを構想している。ここで注目したいのが、児童が説明的知識を習得できたかどうかをどう評価するのかということである。これを正しく評価することで、活用段階でも児童が正しく知識や技能を扱うことができる。

この先行研究から分かるようにこれからの小学校の社会科で求められる授業とは、児童が「主体的・対話的で深い学び」の中で、生きて働く「知識・技能」を習得、活用する授業であり、それを確かに見取る評価の方法が必要不可欠になってくると言うことができる。そして、それらを開発し、児童が将来、社会を生き抜いていけるような資質・能力を育みたいと考え、「パフォーマンス評価、習得・活用(探究)型授業開発—水産業のさかんな地域(小5を例に)—」という主題を設定した。

Ⅲ実践

1. 実習校と児童の実態の一端

(1) 実習校の実態

連携協力校のO小学校は全校児童605名、学級数21(うち特別支援学級3学級を含む)の中規模校である。明るく元気な児童が多く、話し合い活動や縦割り活動を取り入れ、学級経営を基盤とした授業づくりがされている。また、本年は市の研究指定校として研究発表が行われた。主題は「友達とかかわり合い、互いに考えを深め、学び合う子の育成」である。先生方は「単元を貫く目的意識」と「かかわり合い」を主な手立てに授業実践研究をされていた。これらは本実践研究でも取り入れさせていただいている。

(2) 児童の実態

教師力向上実習Ⅰ・Ⅱでは第5学年1組の学級で実践をさせていただいた。本学級は男子18名、女子16名の計34名で構成されている。明るく、元気で、前向きな児童が多い。一方で、学力差があるため授業中に配慮する必要のある児童が数人いる。また、男子は比較的積極的に発言をするが、女子は周りの様子を伺いながら発言する姿が多く授業で見受けられる。

①教師力向上実習Ⅰの様子から

教師力向上実習Ⅰでは、「低地のくらし—岐阜県海津市—」を取り扱った。まずは「海拔が低い」「堤防でくらしを守っている」「水が豊富」という海津市特有の地形やそれを考慮した人々のくらしの工夫について習得させた。この習得を基に「海津市の市長になったらこの豊富な水をどう活かしますか」という思考力・判断力・表現力などを問う活用段階の発問をするかかわり合いの授業を行った。するとほとんどの児童が、川遊びスポット、川魚釣屋、水族館を作る、ペットボト

ルの飲み水「長良水」として売るなどということを考えることができた。さらに、市長という仮の立場を踏まえたり、海津市の地形の特徴を踏まえたり、自分の経験と照らし合わせて考えた児童が5人ほどおり、「とにかく人の役に立つ物を作りたい」「プールや温泉などの水を使った施設をたくさん作ってそれで稼いだお金で堤防作りの資金に使う」「水が足りていない国や地域にあげる」といった意見を発表していた。これらの児童は習得したことを知識として活用し、なおかつ市長という立場を考慮して、思考・判断・表現していることが分かる。

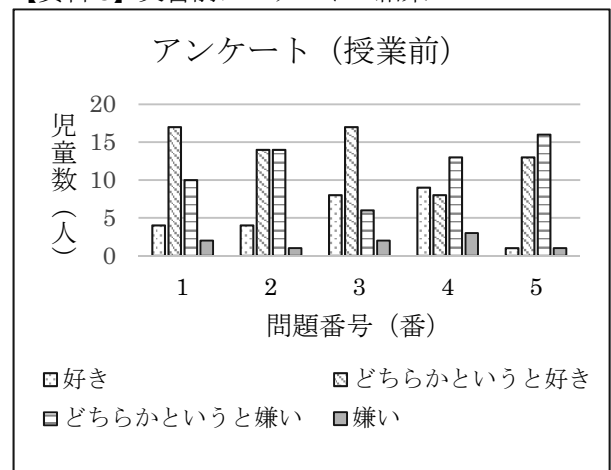
しかし、私の授業力不足から「給食の牛乳をコーラに替える」など習得した事項を踏まえない発言をする児童とそれに面白おかしく反応してしまう児童がいた。このような発言をしたり、面白おかしく応答したりしてしまった原因として先生方の指導から次の三点が挙げられる。一点目は単元を貫く目的意識が希薄だったことである。そのため、前時などとの繋がりを意識できず、これまで習得してきたことを考慮しない発言になってしまったのであろう。

二点目は学習課題がありきたりで、児童が主体的になれなかったということが挙げられる。

三点目は児童に市長という立場の意義を理解させていなかったことが挙げられる。市長という立場の人はその市全体の市民のことを考え、将来においてより良く生活ができるようにするために仕事をする人のことであるということを説明しなかったがゆえに、市長ではなく自分視点で問題を考えてしまったと考えられる。

②教師力向上実習Ⅱ実践前のアンケート調査から

【資料3】実習前アンケートの結果



教師力向上実習Ⅱの初日に、社会科の授業に関するアンケートを実施した。質問項目は1 社会の授業は好きですか、2 社会の授業で不思議に思ったことを分かるまで考えることが好きですか、3 社会の授業で、写真やグラフを読み取ることは好きですか、4 社会の授業で、仲間とグループになって話し合ったり、発表したりすることは好きですか、5 社会の授業で、前までの授業で学んだことを次の授業でも使うことはありま

すかである。

このグラフから分かることは、どの項目も社会科に対して肯定的な考え、否定的な考えがほとんど拮抗しているということである。そのため、どの項目も伸ばすための手立てを講じる必要がある。しかし、特に気になることが二点ある。一点目は社会科という教科の特質の観点から、不思議に思ったことを分かるまで考える児童が少ないことは社会科で養うべき見方、考え方、活用に繋がる概念的・説明的知識の習得の時点でつまづきがあるということが言えるだろう。

二点目は、児童が普段から話し合い活動をしているにもかかわらず話し合いが比較的嫌いもしくは苦手と感じている児童が多いことである。児童の普段からの様子を見ていると話し合い活動を楽しむ姿が多くみられる。今回のアンケート結果と普段の姿から鑑みるに、社会科の授業において話し合い活動をすることが嫌い、苦手と感じている児童がいると推測できる。

したがって、習得した知識を自分の言葉で説明・表現する活動と仲間同士で互いの考えや調べ・まとめたことを楽しく表現する活動が必要であると考えた。これらのことを踏まえ、以下に教師力向上実習Ⅱの研究構想について述べる。

2. 研究構想

(1) 目指す児童像

「魚が私たちの家に届くまでを進んで追究し、それを楽しく仲間に発表できる児童」

(2) 目指す児童像に迫る手立てと研究仮説

①単元を通した一貫性のある追究課題の設定

自分の選択した魚介類が「どこから」「どうやって」「何を使って」「どのくらいかけて」私たちの食卓まで来るのかを授業ごとに解決していく。一単元で一貫性のある追究課題をもたせること（単元を貫く目的意識の醸成）で、最後まで課題に向き合う姿を期待する。

単元を貫く目的意識とは O 実習校で研究の講師のお立場である S 先生の言葉である。それは児童が能動的に「問題を解決したい」「調べたい」などのことを、一単元を通して考えることである。

一方で、習得と活用を単元に位置付けることも必要である。そこで、佐藤（2011）を参考にパフォーマンス課題とメタ認知の観点から学習過程を再構成し、実践することとした。

②パフォーマンス課題、評価の提示と発表、評価

本単元を進めるにあたって、児童にはパフォーマンス課題とルーブリック評価を提示する。

パフォーマンス課題とは西岡（2015）によれば「知識やスキルを使いこなす（活用・応用・総合する）ことを求める問題や課題などへの取り組みを通して評価する評価方法の総称。特に、さまざまな知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題」（注4）のことであると述べている。

また、パフォーマンス課題を取り入れる際には「i 知っているレベルの思考、ii 分かるレベルの思考、iii 使えるレベルの思考の『どのレベルの考える力を育てるのか』ということを考えるべき」であり、「使えるレベルや分かるレベルを目指して行われる活動や討論が、活動主義に陥らず真に深く思考する活動となるには、事実に知識や個別的な技能といった知識の断片ではなく、そうした知識を要素として包摂し構造化する一般的な概念や原理などに、教科内容は焦点づけられていなければならない。」（注4）と述べている。

さらに、実際に評価をする際には、以下の四点に気を付けなければならないと指摘している。一点目は評価の質を問う視点としての信頼性と妥当性である。前者はテストが複数回行われても同様の結果が示されるかどうかを問うたり、採点の一貫性を問うたりするのである。また、後者はそのテスト項目が評価しようとしているものの構成概念を適切に測定しているかを問うものである。

二点目はパフォーマンス評価における信頼性の確保のための「モデレーション」の視点である。モデレーションとは「複数の評価者ないしは複数の評価チームが同じ作品例を評価し、その評価結果を比較・検討することによって、評価規準・基準についての共通理解が図られ、協働でルーブリックの作成・修正が行われる」ことである。

三点目は教育評価としての質を評価する「比較可能性」「評価の統一性」という新たな視点である。これらは、複数の評価者間で評価規準・基準を共通理解し、同じ採点規則に従ってパフォーマンスを公平に評価することによって、評価の一貫性が確保されているかを検討することが教育の質を評価するということである。

四点目はパフォーマンス課題作成に必要な GRASPS による架空の状況設定の必要性である。パフォーマンス課題を作るためには Goal（目的）、Role（役割）、Audience（相手）、Situation（状況）、Product（完成作品）、Performance（実演）、Standard（スタンダード）の7つの項目が必要になる。ただし、常に架空の状況設定が必要なわけではない。架空の状況設定を行うのは、知識や技能などをリアルな文脈で発揮させるためである。重要なのは、課題が知的な好奇心を刺激したり想像力を喚起したりすることによって、回答者の知識や技能などを存分に発揮させるものになっているかどうかということである。

③個人の追究を促すための仲間とのかかわり合い

魚が私たちの家に届くまでを追究していく中で、自分たちの考えをもってから児童にかかわり合いをさせる。自分たちの考えをもってからかかわり合いをすることで一人一人に追究の意欲と思考、判断の機会を与えたい。そうすることで、個人の立てた仮説とその答えの追究を高める姿を期待したい。

④身近な教材提示

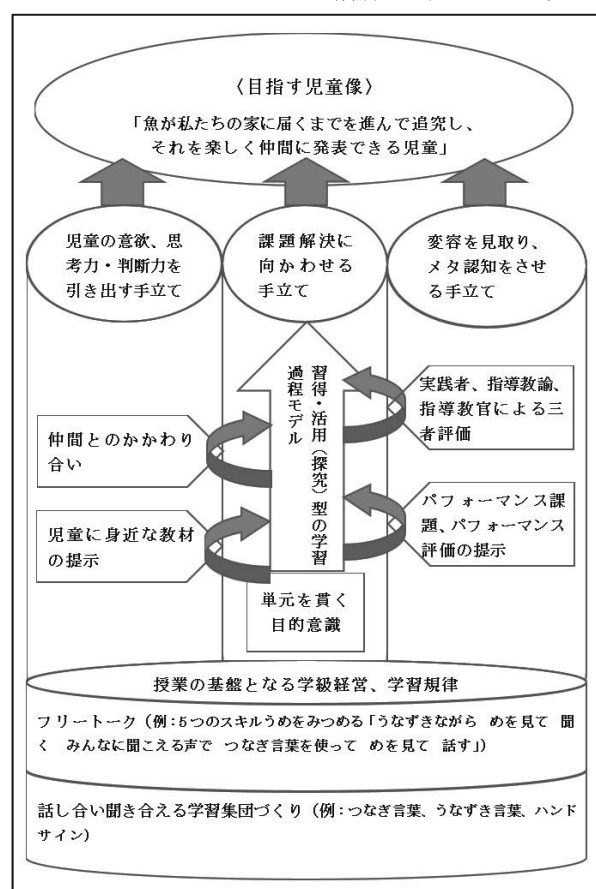
一学期のフリートークにおいて好きな寿司ネタを話す場面があった。そのため、児童が普段よく食べるマグロやタコ、サンマなど身近な魚介類を提示する。児童それぞれに好きな魚介類を選択させ、それらを追究させるようにする。そうすることで、自分の好きな魚介類がどこからどうやって来るのか問いをもち、単元を通して調べていく姿を期待する。

(3) 検証方法

- ①単元前後のアンケート調査の変容分析
- ②児童のパフォーマンス評価の記述の分析
- ③児童の学習シートの記述の分析

(4) 研究構想図

【資料4】教師力向上実習Ⅱの研究構想図
(作成坂本 2017年1月)



3. 実践内容

(1) 単元名

「水産業のさかんな地域」一魚が私たちの食卓に届くまでのルーツに迫るー

(2) 単元の目標

- ①魚介類が海から水揚げされてから、私たちの食卓に届くまでのルーツに関心をもち、将来の水産業の行く末や問題について意欲的に考えることができる。
(社会的な事象への関心・意欲・態度)
- ②学習した知識と仲間とのかかわりをもとに魚が食卓に届くまでを多面的・多角的に考え、説明することができる。
(社会的な思考・判断・表現)

- ③複数の写真や資料を比較、関連付けしながら、自分の考えをまとめようとすることができる。
(観察・資料活用の技能)

- ④水産業が私たちの食生活を支える重要な役割を果たしており、それらは自然環境と深いかわりを持ち、水産業に携わる人々の工夫や努力によって営まれていることを理解することができる。
(社会的な事象についての知識・理解)

(3) パフォーマンス課題を意識し、目的意識をもたせるためのカリキュラム・マネジメントー

時	学習活動	□教師の支援、△手立て
習得1導入・基本②	<p>○認知図に魚が私たちの食卓に届くまでの経路を書く。</p> <p>○アンケートに答える。</p> <p>○単元の見通しをもつ。</p>	<p>□魚が私たちの食卓に届くまでを認知図に書かせ、児童の興味とレディネスを確認する。</p> <p>△見通しをもたせるために、今後の予定を話す。また、魚介類が私たちの生活に欠かせないと気が付かせるために日本人の魚の消費量の資料を提示する。</p>
習得2基礎・基本/活用1技能確め、発信⑥	<p>海でとった魚がどれくらいの時間をかけて日本にやってくるのか考えよう。</p> <p>○魚がどこから来るのか発表する。</p> <p>○地球一周の距離と船の速さから魚が家に届くまでに掛かる日数を考える。</p> <p>私たちが食べている魚はすごく遠くから来ている。</p> <p>海でとった魚を新鮮な状態で私たちの家まで届ける工夫を考えよう。</p> <p>○海でとった魚が新鮮な状態で私たちの食卓に届く工夫について考える。</p> <p>○どれが一番新鮮に届けられるのか考える。</p> <p>どうやって魚を新鮮に届けているのだろう。</p> <p>海でとった魚を新鮮な状態で私たちの家まで届ける工夫を調べよう。①②</p> <p>○一人調べをする。</p>	<p>△身近な魚を提示し、個別に選択させることで追究意欲をもたせる。</p> <p>□地図帳で確認させることで、遠いという距離感覚を感じさせる。</p> <p>□地球一周4万キロ、船の速さ時速約55キロという知識を習得させることで、なぜ魚が家に届くまでに新鮮さを保っているのかということにずれを感じさせる。</p> <p>△かかわり合いを行うことで、魚が新鮮に届く秘密について追究の見通しと意欲をもたせる。</p> <p>□板書を並列して、項目ごとに書くことで児童の意見を整理する。</p> <p>□課題の「新鮮」に戻り、一番新鮮に保てる方法を再度考えさせる。</p> <p>△ネームプレートで全員に意思表示をさせることで仲間の意見を全体に共有する。</p> <p>△意見を変えた児童には学習シートに理由を書かせることで意見の変容を見取る。</p> <p>□調べたいことが調べられない児童、パソコンの使えない児童に対して仲間指導をすることで調べたいことを調べられるようにする。</p>

活用2 パフォーマンス課題・評価 (1)	魚スーパーアドバイザーへの道、説明の準備をしよう。	△演示をすることで児童に見通しをもたせる。 △まとめる時のポイントとループリックを提示することで、児童に魚が新鮮なまま私たちの食卓に届く工夫や一番伝えたいことをまとめる際の参考にさせる。 □机間指導をする際は、児童の意思を尊重して指導を行う。
	○一人調べで調べてきたことをノートやポスターにまとめる。	
	魚スーパーアドバイザーへの道、説明の準備をしよう。 ② ○調べてきたことをノートやポスターにまとめる。 ○まとめたものをもとに説明の練習をする。	□次の時間が発表であると伝え、先の見通しをもたせる。 △相手に理解してもらうための説明の仕方の工夫を習得させることで自分の学んだことを深めさせる。 □児童の練習に対するコメントは良い点、改善点を両方述べ、自信と向上心をもたせる。
	魚のスーパーアドバイザーになろう。	△パフォーマンス課題・評価をする。 □6 グループにして一人一人落ち着いて、発表させる。
	○魚についてまとめたことをグループで説明する。 ○今日のできた、分かった、すごかった、を発表する。 楽しく発表できた。 多くの人が水産業にかかわっているおかげで魚が食べられることが分かった。	□魚の流通の話が出たら、二次発問でどんな工夫をしていたのか問い、水産業にかかわる人々の知恵や工夫に気付かせる。 □どこを頑張ったのか詳しく聞き、それを共有し、他授業や次の学びに活かせるようにする。

(4) パフォーマンス課題作成のための GRASPS

Goal…魚の流通経路についての概念を習得し、それを楽しく仲間に発表できる。
 Role…水産業に従事する人。
 Audience…学級の仲間。
 Situation…知らない人に魚の流通を説明する。
 Product…ポスターや調べたことをまとめた文章。
 Performance…教師の発表・説明。
 Standard…児童用のループリック。

4. 実践の実際 (結果)

(1) 第一時、先の見通しをもたせるためのパフォーマンス課題と概念図、アンケートの提示

【資料5】単元の導入で提示したパフォーマンス課題

「水産業のスペシャリストになって
これからの水産業を盛り立てよう」

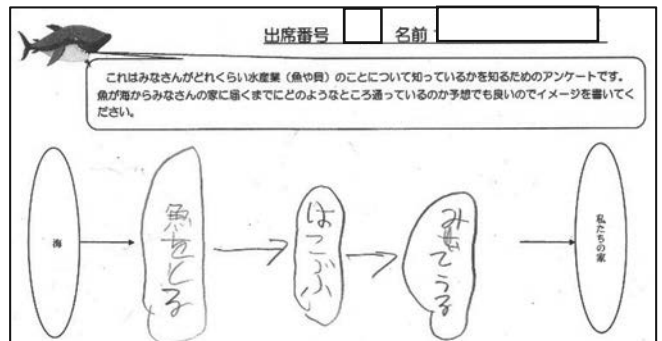
あなたは「 水産」のスーパーアドバイザーです。
ぜひあなたにミッション！

ミッション①
魚介類を多く取っている日本人や外国の人々に向けて、日本がどのように魚を食卓まで運んでいるのか、学んだことをもとに説明しましょう（言葉だけではなく実演してみるともっとわかりやすくなります。）

第一時ではまず、上記のパフォーマンス課題をミッション①として提示し「これから魚のことを勉強していき、それをみんなで発表していくよ」と説明をした。

次にレディネスを調べるために流通経路についての概念図を書かせた。すると 34 名中 28 名がある程度魚の流通の流れを知っていることが分かった。ただし、「市場」や「漁港」「せり」「トラックでの輸送」「漁業、漁法」などキーワードでは書けておらず、具体的に魚がどこから来ているのかはわからないであろうことが分かった。

【資料6】単元実施前の児童の概念図



そこで、次時で基本的な事項を習得させ、どこから来ているのかを寿司屋の資料から理解させた。

(2) 第二時、児童に身近な教材提示

第二時では、まず日本で魚がよく獲れるわけを地形の特徴を説明して習得させた。次に、児童がよく行くお寿司屋さんのメニューを提示し、児童それぞれに自分の調べてみたい魚介類を選ばせ、どこからやってきているのかを調べさせた。

すると、振り返りで、潮目や大陸棚など新しい言葉が分かったと書いた児童が 9 名、日本が魚の大量消費国であると振り返った児童が 4 名、自分の選んだ魚が獲れる場所が意外だったという児童が 10 名いた。

【資料7】第二時のある児童の振り返り

4/今日の振り返り
甘えびは、日本でとれたのと思ったけど、
ちがったのでびっくりしました。

この意外であったと記述した 10 名という数字は全体の三分の一の人数に当たる。本時では習得の段階であるため習得事項を振り返ることも大事ではあるが、自分の好きな魚が遠くから来ているという実感とそれというずれを全員にもたせなければ追究したいという単元を貫く目的意識や切実性が向上しないと考えた。

(3) 第三時、地図帳を用いた視覚化

第三時では前時の反省を踏まえ、地図帳と計算を用いて一番遠くから運ばれてくる魚が、どのくらいの時間をかけて日本にやって来るのかを考えさせた。考えさせる手立てとして、まずは地図帳で自分の選んだ魚が獲れる国と日本の愛知県に印を付け線で結ばせた。

次に、地球一周約四万キロメートル、船の速さ時速

55 キロメートルと仮定して、日本の反対側にあるブラジルから船で魚を運んでくる場合、どのくらいの時間がかかるのかという計算をさせた。

すると約 15 日と 4 時間かかるという答えが出た。そこで日常食べる魚がどうして新鮮なのかという疑問をし、自分の考え、振り返りを書かせた。すると、「私たちの家までに届く工夫が知りたいです。」と振り返り、単元を貫く目的意識をもち始めた児童がいた。

(4) 第四時、個人の追究を深めるかかわり合い

本時は、前時で考えた個人の考えを確かなものにし、次時の個人の追究を深める手立てとするためにかかわり合いを行った。以下に示すのはその一部である。

【資料 8】第四時のかかわり合いの発話記録の一部

T1：今日は工夫をみんなで考えていきます。では、いつてみようか。
C1：ずっと冷凍されているから、新鮮なんだと思う。
C2：船にめっちゃくちやでつかい水槽を用意して、そこに魚が住める環境にして、そこから日本に帰って、市場に出す。
C3：〇〇君と一緒に、ちょっと似てて、船の中に魚が入る大きさの水槽があって、その中に釣ったやつを泳がせておいて日本に戻ったら市場に出す。
C4：僕は船にクーラーボックスを 10 個くらい置いて、釣ったやつをクーラーボックスに入れて市場に運ぶ。
C5：〇〇君に似ていて、釣った時に血とかを洗い流したりとかして、その状態で冷凍して届ける。
C6：僕も〇〇君とか〇〇君とかと一緒に冷凍して運ぶと思うんだけど、アニメとかで出てくるようにやっとうまくしちゃうってどんどん詰めていくのがいいと思います。
C7：船に乗っている状態で、船の中で市場に売る前に準備をしている。
T2：どういう準備？
C8：冷凍とか。
C9：あくまで予想なんですけど、普通の水槽だと船揺れるから水がこぼれちゃうから、倉庫みたいなやつに水を入れる感じの方がいいと思う。
C10：質問します。倉庫の中にどうやって魚を入れるんですか。
C11：前で説明してもいいですか。(黒板を使って説明)
(中略)
C12：まずは血を抜いて水で冷やして、発泡スチロールみたいなやつに入れる。
C13：飛行機で運ぶ。
C14：私も〇〇君と一緒に、魚とかを専用の飛行機を使ったらいいと思います。船だと酔ってあれするし、雨降ると水があれして危ないし、速いと思う。
C15：〇〇君と一緒に運ぶんだけど理由が違っていて、釣った時にガッチガチに冷凍して、水撒いた時に、普通の工場とかだと切れないからチェーンソーとかで切る。
T3：〇〇君水揚げって何。
C16：釣った魚を港で揚げること。
(以下省略)

これを見ると児童が「ちょっと似ていて」や「一緒なんだけど理由が違って」など仲間の意見を聞き、つなぎ言葉を使ってかかわり合いをしていたと分かる。

一通り意見が出た後、再度学習課題に戻り、「新鮮とはどういうことか」ということを確認した。その際、全員に意見を表明させるために一人一人ネームプレートに黒板に貼らせ、意見を変えた児童には学習シートにその理由を書かせた。本授業の振り返り欄から三点の傾向があったことが読み取れた。一点目は意見を変えた傾向である。自分の意見をもつ段階では、A 児は「冷凍する」と書いていたが、B 児の「海の中で運ぶ」という意見を聞いてからは「新鮮は死んでから時間が経っていないって言うんだけど、海の中なら死んでいないからもっと新鮮」と意見を変えている。

二点目は自分の意見をもちつつ仲間の意見のよさを受け入れている傾向である。例えば、C 児は「今日いろんないいけんがあつてぼくはれいとうこがよいと思うんだけど、ひこうきも良いなと思いました。理由はより速くつくため飛行機でやったら良いと思ったからです。」と振り返りをしている。

三点目は自分の意見を変えない傾向である。D 児は「みんなそれぞれ、新鮮な状態を保つ方法が違うんだなと思いました。でも、ぼくは冷凍の方が一番良いと思います、だいたい前に本かテレビで冷凍するとうまみや新鮮さが保てるとあったからです。」と、自分の経験を軸に意見を形成していることが分かる。以上のことを基に第五、六時では一人調べを行っていった。

(5) 第七・八時、パフォーマンス課題の準備とルーブリックの提示、発表の仕方の指導


本時は児童にパフォーマンス課題とルーブリック、発表のポスターや発表原稿の型、仕方を提示した。ルーブリックや発表の型については 2. 研究構想 (2) ②でも述べたように信頼性、妥当性を高める必要があるため、実践者 (筆者)、実践者 (指導教諭)、研究者 (指導教諭) の視点でモデレーションを取り入れた。

【資料 9】ルーブリックのモデレーションまとめ

実践者 (指導教諭)	教師用のルーブリックを児童に提示しても分かってもらえない。 児童の現状、能力を考えて児童用と教師用のルーブリックで効果的に分けるべきだと思う。
研究者 (指導教諭)	①楽しくできたのか項目の最初に来るべき。これが単元の初めと終わりを貫く追究意欲に繋がる。 ②発表する際に話す順番、話の構成も工夫させる必要がある。児童が大事にしたい過程やキーワード、全体像を分析的に考えられるように指導をすると良い。 ③自分の考えを話させる時は、一つ目は、二つ目はなど、ナンバリングして文章をまとめる論理的な話し方を教える。 ④タイトルをつけさせると児童が「一番何を伝えたいのか」を言語化できるようになる。 ⑤難しい言葉 (用語) を簡単な言葉に置き換えさせて自分で分かるようにする。

以上の指導を基に筆者が修正を行い、児童にルーブリックと発表の型を提示した。

【資料 10】児童用ルーブリック



ルーブリック

これができればスーパーアドバイザー


これはみなさんが発表をするときに気をつけるところです。意識して発表をしましょう。

内容	○
楽しく発表できた。	
みんなに聞こえる声で発表できた。	
魚が海から家に届くまでを説明できた。	
魚が新鮮なまま家に届く工夫を説明できた。	
調べたことをもとに自分の考えを発表できた。	

○が 4、5 こそスーパーアドバイザー

○が 2、3 こそミニアドバイザー

○が 0、1 こそアドバイザー



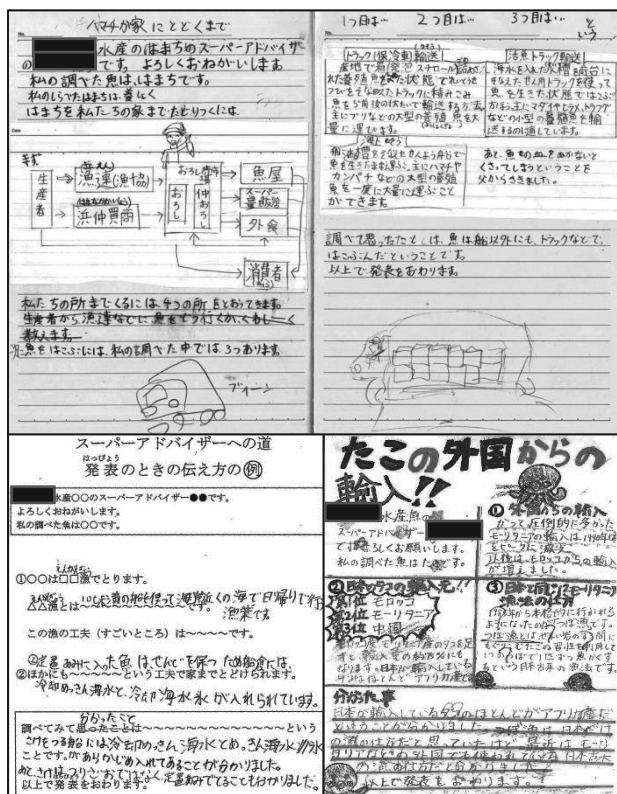
発表やポスターの型を示し、児童のプレ発表を聞き、良いところ、改善すべきところを指導することで児童がより良い発表をしようとする姿があった。例えば、発表の型を用いて自分の言葉に直す児童がいた。

また、たこを調べた児童は、はじめはこの釣り方

について書いていたが、「あなたが一番みんなに伝えたいことは何かタイトルと一緒にもう一度考えてみて」と指導をすると、外国から輸入されていることに注目し、タイトルや自分で分かったことを書く欄に輸入について詳しくポスターに書いていた。

さらに、ハマチについて調べた児童のプレ発表を聞いた際に、ナンバリングが必要だと感じ、指導をした。その結果、発表原稿に「一つ目は、二つ目は」と書き、発表する時に意識ができるようにしていた。

【資料 11】発表物に修正をする児童の発表資料



(6) 第九時、パフォーマンス課題の実践

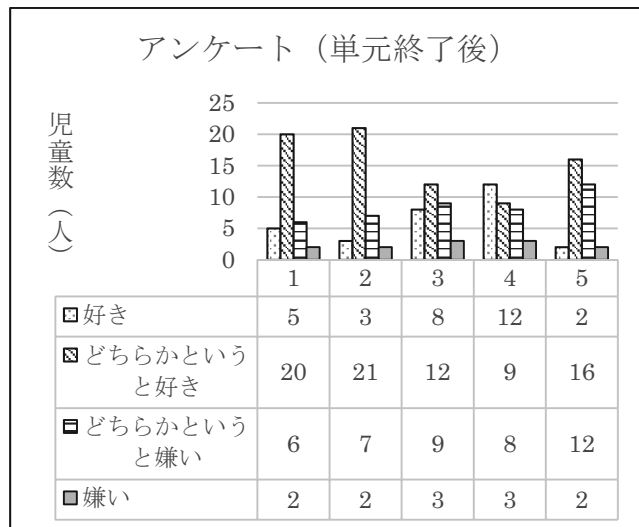
本時では一人一人調べ、まとめてきたことをゆっくりと落ち着いて発表することができるよう学級を 5～6 人で一つのグループに分け、一人 3 分で発表を行った。その後自己評価をさせ、全体でどのようなことができたのか、分かったのか、すごかったのかをかわらせ、他のグループが発表したことや自分たちの学びの振り返りを行うことができた。

【資料 12】パフォーマンス課題に取り組む児童



(7) 単元終了後のアンケート調査の結果

【資料 13】単元終了後のアンケート調査結果



V実践の分析と考察

ここでは、実践したパフォーマンス課題の評価を行うことによって、設定した目指す児童像に児童が近付いたのか、またパフォーマンス課題が効果的であったのかということについて述べる。

1. 量的な変容

まず、単元終了後に行ったアンケート調査を見ていく。実践前に 1 社会科が好きかどうかという質問に対して好き、どちらかという好きと答えた児童(以下、肯定群)は 21 人、実践後は 25 人に増えた。また、2 社会の授業で不思議に思ったことを分かるまで考えることが好きですかという質問に対して肯定群が実践前 18 人だったのに対して実践後は 24 人に増えた。さらに、4 社会の授業で、仲間とグループになって話し合ったり、発表したりすることは好きですかという質問に対しては肯定群が 17 人から 21 人に増えたことが分かる。このアンケートからパフォーマンス課題を通して、児童が楽しく追究したり、仲間とかかわったりすることができたと考えられる。

2. 質的な変容（抽出児を例に）

次は抽出児の発表した映像、ポスター、発表原稿、自己評価、概念図を基に筆者、指導教諭、指導教官の三者による評価を行う。これは先に述べた評価の妥当性を確保するためである。そのため、教師用のルーブリックを指標に、評価を行い、パフォーマンス課題が有効であったかどうか分析、考察する。

なお、共通点については波線（〰）を、相違点については二重線（＝）を引いている。

(1) 抽出児 X

抽出児 X はアンケートのほとんどの項目で肯定的な回答をしている。また、日ごろのテストでも高得点を取っており、学力的には高位に位置すると考えられる児童である。

【資料 14】 教師用ルーブリック

ルーブリック（教師用）

発表をするときに気を付けること（評価規^{ひょうかきじゅん}準^{きじゅん}、基準^{きじゅん}）

評価レベル	評価の内容
スーパー アドバイザー	①楽しく発表できた。 ②みんなに聞こえる声で発表できた。 ③発表の組み立てを自分なりに工夫して説明することができた。 ④魚が海から家に届くまでを説明できた。 ⑤魚が新鮮なまま家に届くまでの工夫を説明できた。 ⑥調べたことをもとに自分の考え、疑問を発表している。
ミニ スーパー アドバイザー	①まあまあ楽しく発表できた。 ②ほとんどの人に聞こえる声で発表できた。 ③例に沿って、発表の組み立てを考えながら説明することができた。 ④魚が海から家に届くまでの一部を説明できた。 ⑤魚が新鮮なまま家に届くまでを工夫を説明できた。 ⑥調べたことをもとに自分の考えを発表している。
アドバイザー	①少し楽しく発表できた。 ②近くの人に聞こえる声で発表できた。 ③発表の組み立ての例を使って、説明することができた。 ④魚が海から家に届くまでの一部を説明できた。 ⑤魚が新鮮なまま家に届くまでを工夫を説明できた。 ⑥調べたことをもとに自分の感想を発表している。

発表・評価する時のルーブリックとして3段階、6項目を設定したモデル。以下は項目の意図である。

1は学びの楽しさ、主体性であり、単元全体を貫く課題発見・追究能力の基盤である。

2・3はアウトプットとしての表現力、ここでは発表プレゼンテーションの習得から活用への資質・能力を問うもの。

4・5は本単元での学びのポイント（習得・活用）であり、教科(単元)における「本質的な問い」にかかわる点である。

6は1～5を踏まえて、対話的な学びから探究的な学びへのステップを示したものである。

【資料 15】 抽出児 X の評価

評価者	評価の内容
実践者 (筆者)	①発表は原稿を見ながらも仲間の方を見て発表した。 ②発表原稿からは、一度書き上げたものを <u>発表の型や自分の伝えたいことの順番に並び替えるための囲みや矢印</u> が見られた。また、「スシローのホームページではカナダ・グリーンランドと書いてあったけど実は福井県でもとれる」と習得内容を批判的に考えていることが分かる。 ③さらに、「今度は海外でもこの漁でとっているのかということですが」と <u>未来志向で次の追究課題を設定しようとしている</u> ことが分かる。 ④最後に概念図の変化として、魚が通る場所を繋ぐ輸送手段であるトラックが加わっていることから <u>魚の流通の流れの概念を習得した</u> と考えることができる。
実践者 (指導教諭)	① <u>発表の仕方やまとめ方がとても上手な X</u> 。しっかりと（魚が）届くまでを自分で理解してまとめているところがすごい。 <u>ちょっとした豆知識や聞いている人がクスッと笑うポイントも入れる</u> ところが良い。 ② <u>調べてよかったなという一言</u> があると良い。
研究者 (指導教官)	① <u>発表の型、構成が良いので論理的で分かりやすい</u> 。 ② <u>キーワードや重要な概念が汎用化ができており、課題をも正しく捉えており、意欲的に追究しようとしている</u> 。 ③スシローのホームページの引用など <u>実生活とのかわりを意識</u> して、学びを広げようとしている。 ④課題としてはなぜ甘海老なのかの選択理由を述べる、年間 120 トンの数字の意味について述べる、

日本では福井県以外はどこがなど調べたことの意味付け、考察、評価の視点が望まれる。

以上の三者の評価から、論理的な文章構成力、習得事項の活用・汎用能力があり、楽しく進んで追究していたことが分かる。一方で課題としてメタ認知能力が挙げられる。そのため、学びの振り返りの時間を取り入れる必要があったと考えられる。以上のことからスーパーアドバイザーであると評価する。

（2）抽出児 Y

抽出児 Y はアンケートで社会科は好きと答えながらも不思議を分かるまで考えたり、話し合いがあまり好きではなかったりしている。ここから学力的に中間層に位置する児童であると考えられる。

【資料 16】 抽出児 Y の評価

評価者	評価の内容
実践者 (筆者)	①発表の姿から <u>少しもじもじしている様子</u> は見られ、自己評価でも楽しく発表できなかったと評価しているものの、聞いている人に、ノートに書いた魚の流通経路を見せながら説明ができていた。 ②発表の原稿を見ると、マグロの釣り方、 <u>流通経路がナンバリングされて、分かりやすい説明の型ができていた</u> と考える。 ④ただし、最後の自分の考えを説明するところで「いろんなしかたで魚をとったり、いろんなばしょをとってきて」と記述しており、自分の <u>調べてきたことを深く考えきれていない様子</u> が伺える。 ⑤最後に概念図を見ると、内容はさほど変わりが無いように見えるが、漁連や卸市場など <u>自分の調べてきたことをしっかりと踏まえて書くことができている</u> ことから概念の習得ができていていると感じる。

実践者 (指導教諭)	①すごいと思ったところが「 <u>6カ所も場所を通して届く</u> 」「 <u>一本釣りは一匹一匹釣るので痛みが少ない</u> 」とすごくわかりやすく、確かにすごいというかそうだなと思う。 ②調べて分かった、発見した様子がよく分かるまとめ方でとても良いと思った。発表は恥ずかしがっていたように思う。
研究者 (指導教員)	①発表の型、話し方、ノートのまとめ方を十分に意識しており、わかりやすく整理できている。 ②流通経路の図示、キーワードの数字などを工夫しており、意欲的な追求態度が見られる。 ③調べたことを基に、 <u>一番伝えたいことは何かの整理や重点化が不十分</u> なため、あれもこれもの報告になってしまっている。例えば、マグロの鮮度の確保、マグロならではの特色などから調べたことを再構成できるとさらに良かった。

以上の三者の評価から、楽しく進んで学習課題を追及し、分かりやすい説明の工夫をしていたことが分かる。一方で調べてきたことを整理し、重要箇所順に順位付けすることに課題が見られた。そのため発表の前の段階で自分の学びを振り返る時間を確保する必要があっただろう。以上のことからスーパーアドバイザーとミニスーパーアドバイザーの間であると評価する。

(3) 抽出児 Z

抽出児 Z は社会科や勉強全般に対して苦手意識があり、授業中の発表もあまりしない。そのため学力的に低位に位置する児童であると考えられる。

【資料 17】抽出児 Z の評価

評価者	評価の内容
実践者 (筆者)	①緊張した面持ちで発表に臨んでいた。ノートをじっと見るような形で発表をしていたが、 <u>普段立って発言することが少ないためよく頑張った</u> と感じる。 ②発表原稿には <u>遠洋漁業の説明があったり、話す順番を変えていたり工夫をしていた</u> 様子が伺える。文章の量は少ないが、一人調べの時間には「この漢字はなんて読むんですか」など分からないことを <u>わかって必死に努力をしていた</u> 。 ③最後に、概念図は単元後に実施したものの方が書けなくなっていた。Z は算数などで前時にやったことを覚えていないと、やったことなのにできないと自信を失い、固まってしまうことがある。今回もそれを引き起こしてしまったのではないかと考える。
実践者 (指導教諭)	①調べたことが少し少ないような気がします。書いてあることはよくわかりますが、 <u>遠洋漁業の後どうやって届くのかを書けると良い</u> と思います。 ②後は自分の感想というか <u>調べてよかった</u> と思うこ

	とが伝えられると良いです。
研究者 (指導教員)	①発表意欲、学習意欲はあるが、学び方や自信が十分でなく、これからの活躍が期待される。 ②課題の意味、調べる必要性、自分にとっての楽しさなどを身に付けさせながら社会科におけるパフォーマンス課題追究の面白さに気付かせていくことが必要。 ③遠洋漁業の説明は上手で、 <u>カツオを調べた理由やこだわりなどもまとめる段階で個別に支援があれば、さらに楽しく活動できただろう</u> 。

以上の三者の評価から、学び方や課題の把握が十分ではなかったことが分かる。しかし、頑張ろうとしていた姿は見られた。そのため、その頑張りを個別支援の際に認め、一つ一つ丁寧に学び方を教えたり、本人の実生活と結び付くような話をしたりする必要があったと考えられる。以上のことからアドバイザーであると評価する。

VI 成果と課題、今後の展望

1. 成果

(1) 確かな習得とパフォーマンス課題の有効性

抽出児に見られたように一人調べを行い、それを仲間に説明することで、ほとんどの児童の単元後の概念図に変化が見られた。

また、一単元で一貫した目的意識をもたせ、ポスターや発表原稿の最後に自分の意見や次に調べたいことなどを書かせたり、パフォーマンス課題 GRASPS を設定したりしたことで児童が次の追究意欲を芽生えさせている様子が見られた。このことから、ただ調べるだけではなく仲間に説明するというパフォーマンス課題が生きて働く確かな習得に繋がるということが言えるだろう。

(2) 児童の変容を見取る三者評価の有効性

抽出児 X、Y、Z の評価を三者で行うことでそれぞれ同様もしくは相違の見解を得ることができた。このようにすることで一人の主観に陥ることなく客観的に児童の変容を見取り、活用・探究段階の学習過程の編成が可能になると考えられる。

2. 課題、今後の展望

(1) 指導計画時間を意識した単元構成

本実践研究で扱った単元は指導計画書では 9 時間完了になっている。予定では習得したことを用いて現代の水産業が危機的な状況にあることに対して価値判断や自分たちにできることを考えさせるという活用・探究段階までを 9 時間の中に収めたいと考えていたが、筆者の授業実践力、指導力の無さからそこまでとり着くことができなかった。

加えて、パフォーマンス課題を児童に準備させるには予想以上に時間が掛かった。この課題を解決す

【資料 18】実践の省察を踏まえた改善ループリック(案) ループリック (教師用)

発表をするときに気を付けること (評価規^{ひょうかきじゅん}準、基^{きじゅん}準)

課題	魚が私たちの食卓に新鮮に届くまでの流通経路と工夫についての説明のループリック試案					
レベル	1. 地域の地理的な諸条件と人間との言みを関連付ける。	2. 政治、経済などにかかわる多様な視点で、よりよい社会の構築に向けて課題に対して選択・判断するための概念や理論と関連付ける。	3. 分析、考察を情報リテラシーの観点から行っている。	4. 目的に合わせて、発表内容を論理的に構成している。	5. 他教科への学び・生き方、認識の再構築、探究。 ①学びの教科横断・汎用性の意識的活用 ②課題発見・探究・解決・メタ認知能力	6. 深い人間的な学び、深く鋭い判断力や新たな価値観・論点等の創造、批評性の高さ。
5 (S)	課題についての正確な理解のもと、特に優れた判断や認識による説明ができています。(5~6項目)					
4 (A)	課題についての正確な理解のもと、的確で妥当な説明ができています。(4~5項目)					
3 (B+)	課題に対しておおよその理解が出来ており、課題に正対する説明が少しできています。(3項目)					
2 (B-)	課題に対しておおよその理解は出来ているが、十分な説明をするまでには至っていない。(3項目)					
1 (C)	ポスターや説明が未完成、課題を理解しておらず、課題に対する説明になっていない。(1~2項目)					
0 (D)	ポスターや説明が書けず、発表ができなかった。(0項目)					

ループリックの改善(案)

- 1・2 社会科における「本質的な問い」の項目
- 3 情報リテラシー(汎用的なスキル)にかかわる項目
- 4 論理的な内容の構成、文章作成(プレゼン)の項目
- 5・6 教科の学びから課題発見能力・人間的な学びへの項目

するためには教科横断的なカリキュラム・マネジメントが必要になってくる。そこで、国語科との横断的な繋がりをもたせることが有効であると考えます。例えば、5年生、国語、東京書籍には「和の文化を受けつぐー和菓子をさぐる」という説明活動をさせる単元がある。国語の授業で説明の型を習得させ、社会の授業内容を活用段階として説明させることで各教科の学習過程に余裕をもたせ、バランスよく授業を行うことができると考えられる。

(2) 確かな評価のための詳細なループリック

実習校の指導教諭と教職大学院の指導教官にモデレーション、評価をしていただいたため、評価の信頼性、妥当性は確保できた。しかし、評価の際に指導教諭から「どっちのレベルか迷うな」というコメントをいただいた。そのためループリックの評価レベルや基準を細分化し、一人一人の児童を正しく見取ることのできる規^き準・基^き準を作る必要があると考えた。そのため、先生方の指導を基に改善したループリック (案)【資料 18】を作成した。

(3) かかわり合いの位置付けの明確化

本実践研究の単元第四時に追究を深めるかかわり合いを行った。二次発問で「一番新鮮に魚を届けるためにはどの方法が良いのか」を尋ねたが、指導をしてくださった多くの先生方が「仮説の段階である二次発問は必要だったのか、並列的なカテゴリーの分け方だったのか」と指摘していただいた。

このことから、何のためのかかわり合いなのか、どのように板書をすれば児童の思考が整理させるのか考えて授業をする必要があると感じた。

【注記】

- 1・2. 中央教育審議会教育課程部会「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議まとめ(案)」(2016年9月9日)、同「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策について(答申(案))2016年12月」など、参照。
3. 米田豊著『「習得・活用・探究」の社会科授業&評価問題プラン小学校編』

2011年6月。

4. 西岡加名恵他編著『新しい教育評価入門(有斐閣コンパクト)』(有斐閣2015年)など。

【主な参考文献】

1. 文部科学省、国立教育政策研究所関係等

文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会科』(2010)、同「教育振興基本計画」(2013年6月閣議決定)など。

2. 実践関係

- (1) カリキュラム・マネジメント、評価開発・方法論関係

ダイアン・ハート著『パフォーマンス評価入門』(ミネルヴァ書房2012年)、香川大学附属高松小学校『活用する力を育むパフォーマンス評価ーパフォーマンス課題とループリックを生かした単元モデル』(明治図書出版2010年)。

- (2) 社会科授業理論・実践文献関係

筑波大学附属小学校社会科教育研究部著『筑波発社会を考えて創る児童を育てる社会科授業』(東洋館出版2015年)、岩田一彦著『小学校社会科 学習課題の提案と授業設計ー習得・活用・探究型授業の展開』(明治図書出版2009年)。

- (3) 習得・活用・探究、授業研究・学習課程構想論関係

習得・活用(探究)型の学びを位置付けた学習課程論(授業研究論)については以下の文献を参考に、社会科教育・パフォーマンス評価・メタ認知の関係から(坂本の研究構想の立場から)再構成を行った。佐藤洋一他「国語科におけるアクティブ・ラーニングの開発と課題ー『質の高い深い学び』につなげる活用型テキスト」(愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 第1号、2016年3月)、同編著『国語科「習得・活用型学力」開発と授業モデル(全4巻)明治図書2011年』など。

【付記】

本研究における実践は、連携協力校である愛知県公立O小学校にて行わせていただきました。O小学校では、大学院2年次よりお世話になり、校務ご多忙の中、校長先生をはじめ、指導をしてくださった先生方、温かい言葉で励ましてくださったすべての教職員の方々に深く感謝申し上げます。

最後にはなりましたが、大学院入学当初から、学校サポーター活動や実習、研究のご指導をはじめ、院生、教員としての在り方まで、手厚くご指導していただきました佐藤洋一教授、多様なフィールド実習、教師力向上実習Ⅲでご指導いただいた川北稔准教授はじめ、時に厳しく、時に温かく指導・助言をいただきましたすべての教職大学院の先生方、事務の方に心より感謝申し上げます。